74

宇津木昆台の医学について

松岡　尚則[1,2,3]，別府　正志[4]，田中耕一朗[2]

[1] 公益財団法人 研医会，[2] 東邦大学医学部東洋医学講座，[3] 医療法人 弘仁会 岡林病院
[4] 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター

【緒言】

米田該助は，「『風寒熱病方経篇』は昆台が最も力を注いだものとの評価がある．『傷寒論』は一大文章であって，前後の関係のない片々たる章句を寄せ集めたものではないとして，前後の文章との関係を詳しく考察して，章句を移動して，それによって解説を下している，と注目すべきこととして大塚先生は明快に指示されている．それを根拠に『古訓医伝』を読んでみた．正直なところ，ほとんど理解はできなかった.」としている．宇津木昆台の学説がこのように，なぜ難解なのであろうか．これについて考察した．

【方法】

宇津木昆台の墓を調査した．『古訓医伝』の風寒熱病に関する部位を調査・考察した．浅井貞庵の『脈鑑』と宇津木昆台の『宇津木昆台先生脈候弁　附尾脈伝并脈説』の脈診を比較した．浅井正封の『身體名』と宇津木昆台の『古訓医伝』における「表裏内外」の使われ方を比較した．

【結果】

南禅寺福地町の慈氏院に宇津木昆台の墓を認めた．

宇津木昆台は，『古訓医伝』において，風熱水つまり，風寒熱の理由を仏典の『思惟略要法』や『涅槃經』から引いていた．

浅井貞庵の『脈鑑』では，脈診は45種，「数躁疾滑濇代喘結促小短細微大鉤長洪虚耎弱実堅牢石弦急緊去静損絶至来独乍時鼓動伝盛及逆和清濁」に分けられていた．宇津木昆台『宇津木昆台先生脈候弁』では31種，「浮沈遅数虚実緩緊洪細滑濇弦弱促結芤微動伏長短濡革散代疾厥大小牢」．陰陽虚実の弁別あるときは62種，更に互いにこれを錯（たが）えこれを重なる時は千種万種になるように分けられていた．

『身體名』下巻では，出入が「腹内」と「腸外」と「腸内」と「腸中」と「胞中」にあると指摘があった．

宇津木昆台は「表裏と内外と別に部分あるに非ず．表より言うときは裏と云ひ，内より指すときは，外と云ふ.」，「この外の字，表を指て言うなり．凡そ外と言うときは，必皆内より指の弁なり.」，「外の字，内より表位を指て，外と為者なり.」，「外不解，これらの類，唯表を指すのみならず．少陽柴胡の位を指て，外を為者なり．此陽明を以て内となすこと，其中に含めり.」，「裏を攻べしと云は，医の命ずるの語なり．此表より裏を指なり．内を攻べしといえはずして，裏を攻べしと云．此病者の表よりして，其裏を指たるなり.」，「此表より始りて，裏脱後に生ず．故に表裏不解と曰ふ．此條始め内外の義を示し，後ち表裏の義を示すなり.」，「其他表裏内外の徴，枚挙に遑あらず．類を以てこれを推すべし．但，裏表外内とはいはざるを以て，表裏内外の義を知るべし.」としていた．

【総括】

宇津木昆台（1779～1848）は，名は益夫・謙，字は天放，通称を太一郎といい，昆台・五足斎・霞谷と号した．字を天敬とする資料もあるが誤りである．五足斎と号があるように，宇津木昆台は神，儒，仏，老，医をおさめたとされる．

宇津木昆台は，『古訓医伝』において「風寒熱病」で，『傷寒論』を解説していた．この「風寒熱」はインド医学（仏教医学）における三大を意味することから，宇津木昆台の医学はインド医学（仏教医学）に影響を受けていると考えられた．このため，宇津木昆台の医学は難解であろうと考えられた．

宇津木昆台の医学は，師のひとりである浅井貞庵を進めたものであるが，脈診やその内容において，浅井貞庵とはかなり異なるものといえる．